

みなと元町

タウンニュース

No.
311

Town News



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

「無駄のない満足できる“歩き”でした。また参加したい」 店がら・人がら・味がらで魅せた神戸元町商店街めぐり（まち歩きの記録）



「べっぴんさんのまち元町商店街」は、神戸開港150年記念事業の一環として阪急・阪神沿線観光あるき実行委員会から要請をうけ2017年10月～18年3月まで毎月第2・第4土曜日の2回、抽選で20名の参加者を募集、「元町商店街の店主たちの語らいと楽しい元ぶら散策」を実施した。参加費3千円で、開港150年記念限定の3千円相当元町スイーツ詰合のお土産（9店参加）とカフェでのケーキと飲み物つき。毎回20名をこえる申し込みがあり、次回への参加をお願いする盛況ぶり。まちあるきで訪ねる店は、店の歴史や商品説明など店主に限るという条件を満たしていたいただいた11店舗。

当日13時、阪神電車元町駅東口改札口前に集合。各10名ずつA・Bの2組に分かれ、タウンガイドKOBÉ24(代表・藤井さち子)からガイド各1名が先導、散策は元町商店街東入り口「ラ・ルーチェ」から2時間30分の旅がスタートする。

A組は、和の伝統技術と楽器をモチーフにした逸品で評判の和装店「丸太や」、元祖「高砂きんづば」や「エコレセ」など和洋両分野で神戸の銘菓を育む「本高砂屋元町本店」、エレガントな輸入家具とインテリアショップの「メゾンドマルシェ」。走水神社で児嶋宮司の話を聞き、自家焙煎のこだわり珈琲で人気の「はた珈琲店」でやすんだあとアクセサリー、革小物などクリエイターの30ブランドを取り扱う「TuKuRu」から、店頭で昔ながらの手焼きを実演する神戸名物瓦せんべいの元祖「亀井堂総本店」までのコース。

B組は、色鮮やかなフルーツと生ジュースが人気の「フルーツショップサンワ」から神戸風月堂本店と、銘菓「ゴーフル」の歴史やお菓子でできた工芸品も楽しめるミュージアムへ。5丁目では、厳選された材料と熟練した匠の技による神戸家具の「田村家具」、走水神社でA組と落合い宮司の話に耳を傾けた後、ケーキとお茶で目も舌も楽しめる「洋菓子工房パオ・デ・ロ」へ。6丁目は、元町で生まれたレザーブランド「Kiichi」を提案する「スタジオキイチ」から亀井堂総本店でA組と合流、2時間30分の旅を終わる。

まち歩きを終わってお願いしたアンケート結果から、まち歩きを振り返ってみよう。10回のまち歩きで参加した人の総数は206人、女性が160名で全体のほぼ8割を占め、男性は46名。年代別では、60代が89人、50代50人、40代24人、70代19人、30代6名、20代の3名とづく。50代～60代の女性が中心で、毎回、募集人を満たし、グループによる申し込みの関係から定員を超えての実施日もあった。

参加者の住所は神戸市が74人で全体の36%を占めるが、阪急電鉄の主催であり京都、西宮、池田、尼崎、豊中、長岡京、大阪、高槻、芦屋、宝塚、茨木、箕面など沿線からが目立つが、山陽電鉄の明石、姫路、相生、高砂、加古川方面もあり、宍粟、柏原、阪南、和歌山、徳島、東京、宮城県からの参加もあった。

「複数回答可」を前提に、「気に入った場所」への記入には、ほとんど訪れた店の名前をあげたほか「すべての店舗」「商店街全体」「元町すべて」も数件あった。そのほか「商店街の歴史」、「商店街全体」「中華街」「松尾ビル」「4・5丁目」「走水神社」「街灯」「三越跡」があり、元町商店街の多様性や奥の深さを証明する散策にもなったようだ。



「丸太や」家族による演奏の後、呉服の話に



「走水神社」で児嶋宮司から話を聞く

満足度への問いには「大変満足」95人、「満足」113人で、「どちらでもない」1人、「不満足」はなかった。満足の理由は「おいしいケーキセット」「元町の歴史が分かり愛着がわきました」「元町を再発見できました」「知らないことがいっぱい。改めてゆっくり周りたい」「土産物を強制しないところ」「各店主のお話が直接聞けたこと」「楽しかったです」「目からウロコの話がてんこ盛り」「元町商店街のやさしさに触れられたこと」など。

ガイドへのひと言では「丁寧な説明で理解しやすかった」「無駄のない満足のできる歩きでした」「藤井さん、とっても素敵の方でした。またお会いしたいです」「一生懸命説明してくれてとても元町を好きになりました」「的確な話し方がよかったです」「わかりやすく親しみやすい説明すごよかった」「私も神戸検定にチャレンジしようかなと思いました」「気さくで親切、分かり易くて大変良いガイドさんでした」「博識でびっくり」など。

対応した店舗の「温かい店柄」にガイドの「素敵な人柄」、商店街の「味柄」を証明するまち歩きだった。(本事業は、2018年も開催する準備が進められている)



フルーツショップサンワでマダムのお話



「亀井堂総本店」で説明する若主人

「元町・夢街道」

書店の話(13)

鳩居堂(12)

岩田 照彦

神戸で開業した「鳩居堂」のはじまりについて書き加えたい。

熊谷久栄堂として神戸の出版・販売業界で先駆者となった熊谷幸介だが、はじめに「神戸市相生町鳩居堂支店に來り勤め」と、紹介した。幸介が神戸へやってきたとき、相生町に鳩居堂支店がすでにあったのだ。

鳩居堂神戸支店は、どのような人物が取り仕切っていたのか。郷土史家の落合重信が、「歴史と神戸」第十七巻第五号に、電話で得た鳩居堂からの情報として次のような一文を残している。

その後の熊谷久栄堂について知るため第十一代鳩居堂主人熊谷純三に問いあわせたところ、同氏からの返事（一部）として、神戸で書籍を営んでいた者は、鳩居堂六代目熊谷直利（文化十年生、安政二年没）の何番目かの子どもに当り、鳩居堂とは関係なく独立して、本人の意思でもって開業したものと思われま

鳩居堂六代目直利（文化十年生、安政二年没）の何番目かの子どもが、鳩居堂と関係なく神戸・相生町で鳩居堂を開業、書籍業をはじめた、というのだ。鳩居堂の商品を扱う店を神戸で始めたこと

分るが、書籍業をはじめたのは「直利の何番目かの子ども」ではなく、熊谷幸介であることは明らかだ。落合重信の書籍商に焦点をあてた問合せに、鳩居堂本来の商品販売ではなく、書籍業にすり替わってしまったのだろう。「書籍を営んでいた者」は熊谷幸介であり、幸介が神戸の足場として身を寄せたのが、鳩居堂とは関係なく独立して「直利の何番目かの子ども」が神戸相生町に開業していた鳩居堂だったのである。熊谷幸介は、「鳩居堂支店に來たり勤め」というから、まちがない。

香・筆墨の世界は、書籍との関係もちかい。顔を広めるため、鳩居堂の商品は格好のものだったかも知れない。出版に関する活動が実を結ぶのは明治六年、当時の県知事（県令）である神田孝平の、初めての著作「世事要言」だが、全頁、毛筆でしめたものである。筆墨の世界が、幸介を出版という広い世界へいざなつた、といえるかもしれない。

明治七年のころ、幸介は元町七丁目に家を借り独立、商いの品目も書籍を頭に香・筆墨の販売もおこなう店を開業、独立する。相生町と元町七丁目は近い場所にあるが、かつて鳩居堂支店を名乗っていた店のその後については、手掛かりがない。商品のすべてを幸介にゆだねて神戸での商いから身をひいたのだろうか。

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 7月

◆神戸元町商店街連合会 TEL391-0831

元町の芸術家たち展XVI
まちづくり会館地下ギャラリー
7月5日(木)～7月10日(火)
10時～18時(初日12時～、最終日17時まで)
第37回元町夜市 7月24日(火)18時～21時

◆元町1番街商店街振興組合 TEL331-7850

元町1番街水曜市 7月18日(水)10時～19時

◆風月堂ホール(有料) TEL321-5555

もとまち密席「慈雅亭」
7月10日(火)
桂 福丸 桂 よね吉 桂 春雨
笑福亭 松枝 笑福亭 内笑 桂 米團治
前売券は6月11日より風月堂で発売

◆劇団四紀会(有料)元町フジシアター(JR元町駅西口向かい)

劇団四紀会第159回公演家族劇場
「空気がなくなる日」7月14日(土)～7月29日(日)
詳しくは、劇団四紀会までTEL392-2421(20時～)
mail: info@shikikai.com

◆こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

6月28日(木)～7月3日(火)
第19回 新樹会 水彩画展(水彩)
7月5日(木)～7月10日(火)
元町の芸術家たち展XVI

7月13日(金)～7月17日(火)

建築家・宮脇檀のドローイング展(巡回展)

7月19日(木)～7月24日(火)

建築家・宮脇檀のドローイング展(巡回展)

7月26日(木)～7月31日(火)

のむらアート一む 作品展2018

(油彩・水彩・木工作等)

◆元町映画館(有料) TEL366-2636

7月7日(土)～7月13日(金)

「沈黙ー立ち上がる慰安婦」

7月7日(土)～7月20日(金)

「ラッカは静かに虐殺されている」・「ラジオ・コパニ」

「彼の見つめる先に」・「大和(カリフォルニア)」

7月14日(土)～7月20日(金)「息衝く」

7月14日(土)～7月27日(金)

「長江 愛の詩」

7月21日(土)～7月27日(金)「海の彼方」

7月21日(土)～8月3日(金)「あゝ米冠は君に輝く」

※7/24休映

7月21日(土)～8月10日(金)「ガザの美容室」

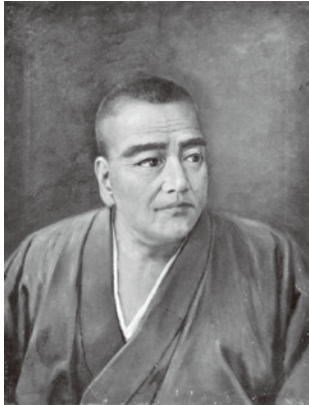
栄町通クリーン作戦は、雨天の為中止となりました。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



観覧ご希望の方は、はがきに住所・氏名・年齢・本紙へのひとことを添えて編集部まで。先着順で10名の方に、ペア招待券をお送りします。

NHK大河ドラマ特別展 「西郷(せご)どん」

NHK大河ドラマ「西郷どん」と連動し、西郷隆盛ゆかりの品や、同時代の歴史資料などを通し、類まれな「勇気と実行力」で徳川幕府を転覆、明治維新を成し遂げながら、最後は明治政府と闘い命を散らす西郷の人間像と彼が生きた時代を浮き彫りにする特別展。



石川静正筆 西郷隆盛肖像画
(個人蔵・鹿児島県歴史資料センター黎明館保管)

場所：大阪歴史博物館6階特別展示室
期間：7月28日(土)～9月17日(月・祝)
TEL06-6946-15728

編集後記

混んだ電車に乗り合わせて困ることがある。最近目立つようになったリュックを背に立つ人である。わたしは利用する区間は三宮まで約十分、ドア付近にたえず人が多く、車内の中ほどは人と人の間には空間も見られるのに、そこまでどつくにはリュックという防波堤を避けなければならぬ。後から乗車した人のパワーに押され、力での防波堤を押しつけたい空間に到達することもあるが、自力で他人が背負うリュックの角度をかえるのは気が引ける。冬の着ぶくれに、コートを脱いで、とは言えないが、これからは本格的な暑い日を迎え、共同利用の電車仲間としてリュック前がけのルールを徹底を。

海という名の本屋が消えた (56)

平野義昌

松方幸次郎 その6

松方幸次郎と神戸新聞に触れておきたい。

1883(明治17)年、兵庫県の日刊新聞「神戸又新日報」が創刊。90(明治24)年、発行元・五州社が経営難に陥り、川崎正蔵が出資した。正蔵が幸次郎を招聘する際の話をも『神戸新聞社社史』(以下『社史』)が書いている。

〈(幸次郎は)「造船」より「新聞」に非常な興味を持ち「神戸又新日報」への経営参加を熱望した。〉^{註1}

正蔵は新聞でも造船でも任せると、松方父子を説得した。もちろん正蔵が幸次郎に継いでもらいたいのは造船所だった。

96(明治29)年10月、幸次郎が造船所社長に就任すると、正蔵腹心の部下が対立、衝突。正蔵は部下を「又新」経営に専念させた。「又新」はたびたび政府批判記事を掲載し、同年12月には松方正義内閣徹底批判を展開した。正義は財政通だが、内閣や議会をまとめられなかった。正蔵傘下の新聞が盟友を批判するのだから、正蔵の面子は丸つぶれだ。「又新」は県域新聞として歴史があり、影響力もある。オーナーとして言論機関を潰すことはできない。川崎家と幸次郎は新しい新聞発刊を計画した。実現するだけの財力と人脈があった。「又新」編集次長を引っ張り、編集・営業すべてを任せた。東京、京都、大阪から人材が集まり、中には名の知れた文人たちがいた。特に元読売新聞記者・江見水蔭は尾崎紅葉門下で文壇のスター候補、連載小説も執筆した。彼らの縁で著名人の寄稿・投書が集まった。98年2月、「神戸新聞」創刊。社主は川崎芳太郎(正蔵の甥で娘婿)、社屋は川崎家所有の栄町6丁目の土地建物。発刊の辞で政治からの中正公明を誓う。発行部数は1日平均7千部(「又新」は1万1千5百部)。創刊1周年に幸次郎が社長就任。祝賀会で記者たちが歓迎の文士劇を上演した。幸次郎は就任挨拶で、「天下を動かす新聞記者が顔にオシロイをぬたくって芝居のまねをするとは何事だ」と叱った。^{註1}

幸次郎が新聞社に出社するのは月に1、2回で、編集に口を出すこともなかった。1910(明治43)年、「中正公明」の方針に反する事件が起きる。幸次郎が衆議院議員補欠選挙に立候補したものの劣勢、連日幸次郎応援記事を掲載した。読者の不評を買い、売り上げ半減、幸次郎落選。新聞私物化は神戸新聞にも幸次郎にも大きな汚点になった。

19(大正8)年、川崎造船所労働争議で労働側が日本で初めてサボタージュ(怠業)戦術を実行した。幸次郎評伝では、組合側に立った新聞記者が警察に検挙されたところ、幸次郎が強硬に抗議し解放させた、とある。

〈おれの会社の争議は、おれが解決する。新聞記者が独自の立場で取材するのは当然じゃないか。ジャーナリズムの弾圧は文化の破壊じゃよ。(後略)〉^{註2}

この事件は『社史』には記録されていない。

大阪毎日新聞神戸支局の村嶋歸之(1891～1965年)がこの労働争議をまとめ、出版している。^{註3}

17(大正6)年、村嶋は貧民窟のルポルタージュで注目され、翌年の米騒動取材で神戸支

局に異動。労働問題に詳しく、講演の他、欧米の運動理論書を翻訳していた。自分がサボタージュ戦術を教えたと述べている。当然警察からマークされていた。

〈「事件中、警察は余を煽動の罪(治警法第一七条違反)で検挙せんとしたが、松方社長は却って警察部長の忠勤ぶりを忌憚し、『己の処のサボはオレが汁ずける(ママ)。警察は構わんでおいてくれ』といい余は助かった。〉^{註4}

評伝の内容と若干異なるが幸次郎は他社の記者を守り、ジャーナリズムを擁護した。

幸次郎は労使交渉で、8時間労働導入の他、低給者の特別増給、残業手当増、さらにサボタージュ中の賃金を支給(加わらなかった職工には賞与の形で加算)し、特別賞与も分配した。村嶋は、幸次郎が争議中に工場を閉鎖しなかったこと、警察の干渉を拒否したこと、新聞で所信表明したこと、特に低給者への配慮を評価する。一方、要求を容れると決めていながら、交渉では「信頼せよ」一点張りだったこと、多大な打撃を与えたと詫げる陳謝状を労働側に提出させたことを批判している。「労働問題に了解のある事は当世資本家中随一」だが、「強者の強みを押通そうとする当世資本家気質から脱する事の出来ぬ過渡期の新入、」と手厳しい。^{註5}

争議では労使とも新聞を活用した。労働側代表が幸次郎から怠業中止を1万6千人の職工にどう伝えるのか訊ねられた。

〈……野倉代表は「皆のものに毎朝新聞を見よと言いつけてありますから神戸又新、神戸新聞、朝日新聞、毎日新聞を通じて能く通信方法が出来ております」と答えている。〉^{註6}

神戸新聞は争議報道で中立を保ったが、他紙は労働側に好意的だった。そのため神戸新聞は労働側から支持は得られず、世評も厳しかった。神戸新聞にとって中立性の岐路だった。18年芳太郎社主引退、翌年幸次郎が社長を辞任し、「川崎」の重しははずれた。

21(大正10)年7月、川崎・三菱大争議が起きる。賀川豊彦指揮の大デモ行進で知られる。警察と憲兵隊が出動し、死傷者が出た。幸次郎がヨーロッパ出張中(Uボート設計図入手)の出来事だった。労働側が幸次郎に帰国を促す電報を打つほど、信頼していた。

最後に《馬車》のことを書いておきたい。

作家・田宮虎彦(1911～1988年)は幼い頃幸次郎邸の近所に住んでいた。

〈朝、ひらいたその門の奥から、カツカツという馬蹄の音と軽やかな軽々のひびきとが聞えて来た。そして、やがて二頭立ての馬車が表通りへ颯爽とかげ出して来るのであった。絵本でみるような馬車であった。〉^{註7}

田宮は3人の馭者の姿は覚えているが、車中の人の姿は思い出せない。松方という名の偉い人だとは知っていた。造船所始業時間は午前6時、幸次郎もそれに合わせて出発する。周辺の人々にとっては馬車の音は目覚まし時計だった。幸次郎は遅刻しそうな職工を見かけると、馬車に乗せてやった。出社後、工場を巡回して、一旦帰宅。諏訪

山の銭湯で朝風呂につかり、元町の理髪店に立ち寄るのが日課であった。^{註2}

幸次郎は時に元町商店街の風月堂に乗り付け、好物のアイスクリームを味わった。

民俗学者・郷土史家の赤松啓介(1909～2000年)は幸次郎の馬車を貴族趣味と批判する。経営や労働問題も「貴族趣味の底にある冷酷な打算と無縁ではあるまい」と切り込む。「いずれ与えなければならぬなら早く」という考え方で、と。さりながら、《松方コレクション》は〈彼の残した最大の国家貢献〉と評価する。^{註8}

1916、17(大正5、6)年頃、道端で夕刊を販売していた少年の思い出を紹介する。

〈……「オーイ、夕刊屋」と松方ハン自身から声をかけられた。慌てて近づき夕刊を差し出すと、「朝日」と「毎日」を取りあげられて、五銭白銅貨を一枚手渡された。(中略、釣り1銭チップ)松方ハンのいそいで夕刊を広げ見入られた姿が、いつまでも私の目に残っていた。松方ハンは優しい人であった。〉^{註9}

少年は馬車を観察していた。米騒動の年(1918年、大正7年)から馬が1頭になったと記憶している。昭和の初め頃には幸次郎は馬車をやめ、不自由な足で徒歩通勤していると噂で聞いた。少年の母は造船所で働いていたし、近所に職工もいて、幸次郎のさまざまな話を聞かされていた。幸次郎が作業服姿で巡回していると、新入り守衛が職工のサボリと勘違いして注意したという笑い話。事故で働けなくなった父親の代わりに子どもを学校に通わせながら給仕に雇うことで、一家の生活を助けた話もある。「川崎」の労働者だけでなく、市民も「松方ハン」と親しく呼びかけた。その「貴族趣味」も愛されていた。

- 註1 『神戸新聞社七十年史』神戸新聞社 1968年
註2 神戸新聞社編『火輪の海——松方幸次郎とその時代——(上・下)』神戸新聞総合出版センター 1989～90年
註3 村嶋歸之『サボタージュ 川崎造船舎怠業の真相』海津書店 1920年
註4 木村和世『路地裏の社会史 大阪毎日新聞記者 村嶋歸之の軌跡』昭和堂 2007年
註5 津金澤聰廣・土屋礼子編『大正・昭和の風俗批評と社会探訪——村嶋歸之著作集(3) 労働者の生活とサボタージュ』柏書房 2004年
註6 田村紀雄「解説——希有の労働ジャーナリスト」(註5所収「解説」)
註7 田宮虎彦・小松益喜「神戸 我が幼き日の……」復刻版 中外書房 1988年
註8 赤松啓介『神戸財界開拓者伝』太陽出版 1980年
註9 林喜芳『わいの新聞地』冬鶴房 1981年



「八時間労働発祥之地」記念碑。神戸市中央区東川崎町1丁目。北側に神戸新聞社があり、「松方ホール」が併設されている。

出来事ファイル (No.18-7)

■モトロク市

元町6丁目商店街は6月2日(土)・3日(日)の両日、「モトロク市」を開催した。6丁目には、手作りのオリジナル商品を扱う店が多く、その流れに沿って今回もアクセサリーや鞆など、すべてが手作りの商品ぞろい。珈琲の販売もあり、休息のためのテーブルと椅子もセットされ、ゆっくり楽しめる場に。土曜日には、バンド演奏もあって楽しい買い物の舞台を演出した。



■ハートミュージアム2018開く

恒例の「もともちハートミュージアム」が6月8日(金)から12日(火)まで、神戸まちづくり会館で開かれた。9日には会館の前で、障がいのある人たちの施設や作業所でつくられたクッキーやお花、東日本大震災と熊本地震で被災した作業所の製品など販売のほか、「フォトフレームづくり」、「WAKKUNと絵を描こう」、「障害者あーと作品展」など、盛り沢山なイベントで賑わった。



■もともちウキウキに「元町シスターズ」

障がいのある人もない人も、ともに楽しむコンサート「もともちうきうき」が6月9日(土)13時から、まちづくり会館2階ホールで開かれた。「しんごお兄さん」「加納ひろみとシャシーバンド」「山崎小夜子」「BIRTHコウノトリ」「ないす」らの演奏に先立ち元町商店街から「元町シスターズ」が出演、好きな町、わらべうたメドレー、贈る言葉、日本抒情歌メドレー、Birthdayなどを披露した。



総指揮役として奈良山会長が先導役の総指揮者として人力車上に登場、元町商店街の各丁から南江正忠命代騎馬武者をはじめ旗差、稚児役など、総勢二十四名が参加して武者行列を盛り上げた。

で、朝十時から午後四時までの行列。行列の幕開けを伝える横断幕につづき、



近藤裕重・元町商店街連合会会長(右から4人目)



中馬かえな・元町5丁目商店街・弥生美容院

■奈良山会長
楠公武者行列の先頭に

幽閉先の隠岐から京都に戻る後醍醐天皇を、神戸で楠木正成の先導で迎えたのが由来とされる湊川神社の武者行列が、晴天に恵まれた五月二十六日(土)行われた。

明治七年は、奇しくも元町商店街誕生の年。湊川神社を十時に出発した行列は午前中、宇治川から楠町・荒田町を経て湊川公園までを巡行、十三時、一行は新開地商店街からアートビレッジセンターを経て川崎重工工業で左折、神戸情報文化ビル前からハーバーランドに入りホテルオークラを経由してメリケン波止場前から鯉川筋を北上、元町一丁目商店街ゲートへ。ひと目行列を見ようと賑わう元町商店街を三・四・五・六丁目と進んで湊川神社まで、朝十時から午後四時までの行列。



奈良山喬一・元町商店街連合会相談役(車上右側)



蓮池國男・御弓・元町1番街商店街理事長

■ホタル観察会 盛況理におわる

神戸山手大学では5月19日から6月1日まで、構内を流れる宇治川の河川敷に出現するゲンジボタル観察のため、19時30分から20時45分まで構内を開放した。昨年は200を超える飛翔数を観る夜が4回あったが、今年は最大でも50匹程度が最大で、ホタルの飛翔数は全体的に少なかったものの、観察に訪れた人は3千人を超え、ホタルを楽しむ人たちが賑わった。



□ふしぎジオラマミュージアム

当館蔵「入江コレクション」の光学玩具・組上絵と、海洋堂フィギュアミュージアム黒壁の「ボックスジオラマ」を通じて、ジオラマの歴史をたどるとともに、観覧者を箱の中の別世界へいざなう特別展。観覧ご希望の方は、はがきに住所・氏名・年齢・本紙へのひとことを添えて編集部まで。先着順で5名の方にペア招待券をお送りします。

場所：兵庫県立歴史博物館
☎079-288-9011
期間：7月14日(土)～9月9日(日)



パノラマ「恐竜時代」／海洋堂フィギュアミュージアム黒壁製作 ©KAIYODO